

安価な労働力に依存したこの繁栄は、今後どれだけ永続していけるのだろうか。仮に中等教育ではここまで論じる機会がないにしても、これこそが本書が提示する重要な課題ではないだろうか。

内藤 (1994) は地理学が本格的に関わるべき課題として、地球規模で人間社会が抱えるグローバル・イシューの「発生のメカニズムの解明と解決ないしは緩和の方途を模索すること」(p. 42) を挙げている。アメリカが事実上世界で最も影響力を持つ国であることを考慮すると、本書で論じられた内容へのより深く批判的な検討は、まさしく内藤の提言を实践する可能性を秘めている気がする。アグリビジネスが構築した工業的農業で短期間に急速な変貌を遂げたハイブレンズは、そのダイナミックな発展過程ゆえに理解すべき重要な地域であるが、それを無批判にとらえることに若干の危惧を感じてならない。

とはいえ、評者は、上記の指摘が膨大な研究成果を積み重ねてきた著者に対する「ないものねだり」であることを十分承知している。既に述べたように、本書は限られた紙幅を考慮したコンパクトな構成にもかかわらず、テキストと読み物の双方から非常に優れている。そもそも、これほど安価で高い質と充実した内容を兼ね備えた地誌書があるだろうか。地理学でアメリカを扱うテキストが皆無に近かった状況を考えると、本書は地理学を学ぶ学生の必読書となることはもちろんのこと、中等教育の社会科や地理歴史・現代社会でアメリカを扱う学校教員の方々から、アメリカ史や農村社会学などの隣接分野で研究に従事する人々まで、多くの人に広く勧めたい一冊である。最後になるが、著者が今後「農と食の」アメリカ地誌に続いて、「都市とエスニシティ」など、他方面にも着目したアメリカ地誌の続編を出版されることを、評者は陰ながら強く期待したい。

(二村 太郎)

文 献

- 植村善博 (2004) : 『図説ニュージーランド・アメリカ比較地誌』ナカニシヤ出版。
 小塩和人・岸上伸啓編 (2006) : 『朝倉世界地理講座13 アメリカ・カナダ』朝倉書店。
 シュローサー, E. 著, 楡井浩一訳 (2001) : 『ファストフードが世界を食いつくす』草思社。Schlosser, E. (2001) : *Fast Food Nation: The Dark Side of the All-American Meal*. Houghton Mifflin.
 内藤正典 (1994) : 地誌の終焉。法政地理, 22, 32-43。
 矢ヶ崎典隆 (2005) : 日本の地理学研究によるアメリカ研究－文献目録－。東京学芸大学紀要第3部門社会科学, 56, 51-63。
 Cronon, W. (2003) [1983] : *Changes in the Land*. Hill and Wang. 2nd Edition. クロノン, W. 著, 佐野敏行・藤田真理子訳 (1995) : 『変貌する大地：インディアンと植民者の環境史』勁草書房。

山下清海著：『池袋チャイナタウン 都内最大の
新華僑街の実像に迫る』洋泉社，2010年11月刊。
191p., 1,400円(税別)

本書は、改革開放にともなう中国人の移動と定着によって、東京のJR池袋駅北口に形成された新華僑街をめぐる人々の物語である。この新華僑街は、日本の伝統的な三大中華街(横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街)とは性格を異にするものとして、2003年、著者によって「池袋チャイナタウン」と名づけられた。著者の授業で横浜中華街を見学した中国人留学生の感想が次のように紹介されている。「ここはとてもおもしろい。だって、こんなところは中国のどこにもないです。ところで先生、いまから池袋へ行きませんか。池袋のほうが本物の中華料理を食べられますよ」。

本書の特色は、登場人物が読者に語りかけてくるかのように、池袋チャイナタウンをめぐる新華

僑一人ひとりの来歴や日々の思いが、著者ならではの丹念なインタビューによって生き生きと描かれている点にある。

「第一章 池袋チャイナタウンとは？」では、池袋チャイナタウンにアプローチするための基礎的知識が示される。68万人(2009年末)を超える在日中国人の90%以上は、1980年代後半以降に日本渡航を果たした新華僑によって占められている。新華僑の急速な増加はグローバルな潮流であり、池袋チャイナタウンは、彼らの集住によって形成されるニューチャイナタウンの一端として位置づけられる。巻末に掲載された最新の「池袋チャイナタウンマップ」には、ニューチャイナタウンとしての特徴が色濃く表れている。著者は、池袋駅北口前の中国食品スーパー「知音」(2010年閉店)が、池袋チャイナタウンの牽引力であったとし、知音が開業した1991年は、バブル経済の崩壊ともなって都心の地価が下がり、ビルの空室が増加する時期に当たると指摘する。この結果、池袋駅北口により近接した街区には、食料品店、IT関連店舗、美容・エステ、不動産業をはじめとする新華僑の生活に密着する業種が集積する一方、伝統的な中華街では主役となる飲食店(中国料理店)は、それらの背後に分散的に立地している様子が見て取れる。

「第二章 彼らはなぜ日本にやってきたか」と「第三章 池袋・新華僑起業家列伝」では、日本渡航前の中国での生活、日本渡航の動機と決断、日本渡航後の生活をはじめとする新華僑一人ひとりの来歴をもとに、「老百姓」(一般大衆)としての彼らの素顔が描かれる。そこには、池袋で起業に成功した者もあれば、夢破れて故郷に戻った者もいる。彼らの多くは就学ビザを取得して日本渡航を果たすが、中国人就学生を語るうえで、「眠さ」が重要なキーワードになるという指摘は示唆に富む。たとえば、日本渡航後の彼らは日本語学校と

アルバイトを両立しながら大学進学を目指す、次第にアルバイトが生活の主体となって、慢性的な睡眠不足に見舞われることになる。このことは、新華僑の故郷(僑郷)における新華僑の送出システムと地域変化を調査する過程で、日本渡航経験者(Uターン者)に対するインタビューを重ねることによっていっそう明らかとなる。

「第四章 新華僑の経営スタイルと暮らし」では、ビジネスの場における新華僑の同胞・同業者に対する警戒心と、兼業(多角経営)への飽くなき挑戦が挙げられている。この理由として、新華僑特有の同郷意識(地縁)の欠如と経営の不安定さであると著者は推測している。さらに新華僑を皿洗い世代「旧・新華僑」と、あっさり起業世代の「新・新華僑」(1980年代以降生まれの「八〇后」)に分類し、既にビジネスに対する姿勢や居住地域に世代間の差違が表れているという。とくに「旧・新華僑」の居住エリアの拡大については、事例として取り上げられた川口市の芝園団地の調査に基づいて記されている。ここでは、子どもの教育を通じた新華僑の親密なコミュニティが形成されている反面、教育に対する不安と熱心さが、今や僑郷の社会問題となっている留守児童を生み出す要因となっていることも否めない。

「第五章 東京中華街構想の波紋」では、これまで横のつながりが希薄であった池袋チャイナタウンの新華僑が、東京中華街構想の下に連帯したことをきっかけとして、彼らと池袋の地元商店会との間の軋轢が、両者へのインタビューをもとに詳細に記されている。著者は、このような外国人ニューカマーズの集住と地元住民との社会的軋轢は、日本各地で起こりうる問題であり、対話を重ねることによって乗り越えて行くべき課題であろうと述べる。

本書は、池袋という身近な場所へのまなざしを手がかりに、中国と呼ばれる地域あるいは中国人

と呼ばれる人びとが、いかに多様性に充ちたものであるかを改めて理解する手助けになるであろう。たとえば、近年の中国人富裕層による訪日観光の拡大は、先発隊として日本渡航と定着を果たした老百姓の「眠さ」によって達成されたと想像するのは評者の飛躍であろうか。最後に、本書は幅広い読者層を意識して平易な言葉で綴られているが、著者の絶え間ないフィールドワークの蓄積に基づく成果として、エスニック地理学はもとより、地域研究とはどのような姿勢で臨むべきかについて貴重な示唆を与えてくれる。一読をお薦めしたい。

(松村公明)